

## 逆さま事件を考える

### 批評できる土壌をつくろう。——山城興勝

昨年十一月に浦添市民会館で開かれた沖縄県芸術祭美術展覧会は、若手から中堅の作家の作品が一堂に展示されたこともそうであったが、沖縄の美術史に残るのではないかというハッピーニングが起こったことでも注目を集めた。というのは奨励賞に輝いた金城準子さんの抽象画「WAVE」(F120)が、逆さまに審査され、受賞したためであった。

いきさつを説明すると、私が県展のカラー特集を紙面で掲載したところ、本人から逆さまに出ていると連絡があり、こちらとしては新聞の工程の中のどちらかで間違えたのであろうと思い、訂正記事をどうするか考えつつ念のために調べてみたら、こちらには間違いはなく、上記のような事実が明白になった。新聞記者の直感でこれは大変なことだと思い、同僚や美術関係者にも相談した。

今だから明かすが、「審査の在り方に問題はなかったか」「仮に本人の間違いだとしても作品を取り扱う係りあるいは審査員に慎重さが欠けたのではないか」「けしからん、こんなことが二度とないように記事にしておくべきだ」と、いろいろな意見は出たものものこちらが納得できるには至らない。確か一日経過してからだと思う。思い切った行動に移すことにした。

直接金城さんにお会いして、「県展の在り方、批評について論議させるいい機会だから何が何でも新聞記事にさせて欲しい」と直談判に及んだ。金城

さんは最初のうちはそれに対して否定的だったが、その内にこちらの話を聞く気になってくれた。予想していたよりも知性的な方で、自分なりに絵画論も持っているように見受けられた。彼女の説明では、中央を斜めに走っている赤い線が右側に行くに従って細くなっていなといけませんが、実際は右側が太くなっていてそのままでは納得できないから、会場に行き、係りの人に立合ってもらった上で、直してもらったという。

彼女から聞いた話とそれまでに私が取材した点を総合すると、彼女がサインを後ろにするために関係者が天地を十分確認しないで審査したか、県の担当者が逆さまのまま審査員に審査させたか、額縁屋に絵を渡す時に本人が勘違いしたか額縁屋が勘違いしたかなどが考えられる。まるでパズルを解いていくようにもつれにもつれ収拾がつかなくなった。ただし彼女の作品は一昨年六月の女流美術展にも逆さまに展示されたそうで、これも審査員が悪かったのか本人が悪かったのかわからない。二度にわたる逆さま事件に本人は懲りて、「サインは前にすることにします」と話していた。

真相はともかく作品が逆さまに展示されたことは事実だったから、同僚とも相談して翌日の紙面に出した。ただ残念だったのは「アシャギ」に出して、生記事で出せなかったことだ。このコーナーはあくまでも雑感を取り上げるスペースだから、正面きって逆さま事件

を論議させることができそうもないからだった。つまり、見る側からすれば、不真面目に書いたと受け止められないからだ。



87県展奨励賞「WAVE」(F120)  
金城 準子

ところが、この記事は大きな反響を越こした。個展やグループ展のオープニング・レセプション、あるいは美術愛好家に会う度にこの話を持ちかけられ、返答に困った。ストレートにこちらの狙いを記事にできなかったことが却って問題を変な方向に発展させたのではないかと、そんな気もした。

今沖縄で個展を開くと、その作家は当事者の友人、あるいはその人に近い人に自ら展評を頼み、絵を挙めることだけに終始した論理を展開させる。沖縄の人は人がいいからあえて厳しい批判はできないかも知れない。言い換えれば、画家と批評する側が馴れ合いに

絵のご購入は **OCクレジット** で  
OC **沖縄信販**

●展示会・案内状のご用命は…

**(有)平山印刷**

☎(0988)89-8748

なっているというわけである。こちらにも紙面の都合、作品自体が展評で扱うまでのレベルに達していないこと、あるいは作品をギャラリーや画廊喫茶をたらい回しにして前回発表したものが大半を占めていること等の理由で、それに応じられない場合もよくある。しかし、これを断ろうものなら一生憎まれかねない雰囲気である。とうとう根負けして了解させられてしまったことも少なくない。

私としては個展、グループ展、公募展にちゃんとした批評ができる土壌を作れるようにするには、今回のハプニングがどちらに落ち度があったかは知らない（もしかしたら金城さんのミスだったかもしれない）。それでも影響力のある県展に間違いがあってはいけ

ない、こういうものの積み重ねが“まあ主義”に発展していくのではないかと思うのである。

この問題が日増しに大きくなっていくうちに沖縄県美術家連盟（与儀達治会長）は、沖縄市民会館での移動展を前に、金城さんが自ら直した通りに展示していいものか、審査員十六人に緊急動議をかけ、再審査する方向で検討していたが、「逆さまでも芸術的評価は変わらない」として再審査は取りやめ、沖縄市での移動展も本展同様に展示した。

関係者の意見によると、本人が記したキャンパスの裏と額の記述が逆さまになっていること、留め金が反対になっていることなどから、審査員には落ち度はなかったとして再審査はしないこ

とで落ち着いたという。

仮に審査員に落ち度がなくても責任をとってみんな辞め、再選挙して再スタートすれば芸術家の厳しい姿勢は見る側にも好感を与えたのではないか、そうでなくても再審査はすべきではなかったか、私はそう思うのである。金城さんはこの事件で随分悩んだらしい。火をつけたのが私ただけにこちらでも申し訳ない気一杯だ。ただ何よりの救いは本人が再び筆を取る気になったことである。あのまま描くことを辞めたのでは私も記者生活の汚点としてずっと後ろめたさを持ったであろう。今沖縄の美術界に必要なのは忌憚のない批評ができる雰囲気をつくることである。逆さま事件はそのきっかけをつくる良い機会だったのでは……。 (美術記者)

真喜志 勉

## 画牢の中の懲りない話



画牢と書いたが“廊”の誤植ではない。昨今の乱立ぶりを見ての造語である。

それはまるで百姓一揆のように“美術館よこせ!!”と云っているみたいな、アリテーに云えば、美術館のない文化県沖縄の天声人語なのだ。

画廊の乱立にコメントを求められた時、「パチンコ屋なみにふえてもいいんじゃないの…」とマジメに答えたのであるが、こうも安直な、壁があれば絵が掛けられます式のものがふえたんじゃない、アタシ画牢というより外に呼び方を知んネーんだヨ、ノ

そんな画牢で個展やグループ展をする人々を見ると、良識や美意識さらには人格すら？マークが点灯する、せまい沖縄そんなに急いでどうするんだヨ!!と云いたくなるのだ。

啓蟄の春、百花繚乱のごとく自称他称の画家がセッセッセと絵を描いて、個展、サークル展、グループ展、企画展、団体展、国際的海外展と目まぐるしく、新聞社の美術担当氏は悲鳴を上げている。

昔、ニューヨークの新聞（ビレッジ・ボイス紙？）に次のような広告が出たことがあるそうだ。「忙しくて絵を描くヒマのない方へ、ゴースト・アーティストお引き受けします、プリミティブ派、印象派、抽象派、野獣派などお好みのまま。」、今、沖縄で出せば、四、五人は電話をかけてくる人がいるんじゃないかな…とったり思わなかったりする。ウチアタイする人がいてもオコッていけない、そういうお方はオーダー・メイド（美術の一技法として認知済み）作品を発表するだけの意欲の持ち主な

のだから、オコるより胸を張っていたきたい…と考えているのだ。

三橋美智也さんは「いつか俺も駅弁を食ってみせるぞ!!」と青雲の志で乗った夜汽車の中で考えたそうだ。苦労をした人は、このような、後になれば笑い話になってしまうような逸話を持っているものである。

しかし、忙しくてゴースト・アーティストに電話をかけてくるようなヒトは、駅弁の野望を達成すると、次は上天井的野望、それも達成すれば鰻丼も吸い付野望さらに私などは名前も知らないオイシイモノ的野望というふうに目的を設定する、自らに課する才能を持っているのである。「上天井がなんだっつうの、沖縄ソバでどうしてイケナイの？」的な、しょぼめの発想を押し込めるパワーを持っているのである。エライノと私は思わず思ってしまうのである。

美術界で無欲テンタンになるのはやさしいことだ、個展だけして、団体展や国際的展に出品しないだけでよい。

一枚の絵がこころの友となります。

ギャラリー **三 廬 外**

〒902 沖縄県那覇市安里66番地 ☎(0988)67-5750

\*額縁の専門店\*

合資会社 **前田額装商会**

〒900 沖縄県松尾2-7-29 ☎(0988)67-4811 FAX(0988)61-0367

お伽話では欲張りはイケナイ人だったのに、今の世の中欲張りになって国際的展で賞を取ったりすると、ムズカシイことなのでソンケーされたりする。

現代は、みなのが王様になりたいというゼータクの欲望の時代なのだ。

人々はまるで「芸術」に飽きていまいふことをオソれるように色々な工夫をこらしてきた。「芸術」に飽きてしまったらお先マックラだ、という洞窟人的根源的恐怖を持ちつづけているにちがいない。

だけど前作と違う絵を見せられると、なにか予想を裏切る意地悪をされているような気がするものらしいが、画家の絵が変化するのはおのずからのことで、別に意地悪なわけではない。ついでに発表の場にも変化をつけ運賃を払って遠く海外の国際的展などでハクをつけるのも限りなく無邪気な絵かきのクセのものと思えば、ハラを立ててオコる気もしない。

江崎玲於奈さんがノーベル物理学賞に決まったのは「半導体のトンネル効果」によるものだが、ボクの頭もトンネル効果のせいか解説を読んでもつつ抜けで何が書かれているのやらかいもくワカらない。同じように、国際的賞に輝いた画家が新聞の中でニカッと笑ってる写真や記事を見ると「半導体のトンネル効果」を見せられたようで、いくらボクの脳がヘタでも何だかバカにされたような気がして、突如カッとなる瞬間湯沸症という持病が頭在化して「オコる気もしない…」と書いた、ペン先が乾かぬうちにオコってしまった。

オコることに懲りない話というオソマツ、

よくまァ、こんなにも負の要素ばかりを寄せ集めた文章を下降志向と決めつけ途中でホッボらず、あえて最後まで読んでくれた奇々なあなたに、しみじみと感謝します。(画家)

印刷・出版等々版下制作



タイポハウス・ミック

〒900 那覇市松尾1-9-30 ☎(0988)62-1673

## 私の好きな画家黒崎彰の世界

神里 清正

私と黒崎彰氏の木版画との出会いは、学生時代にさかのぼります。絵画の好きな先輩の部屋で見せられた黒崎氏の「夕闇」に魅了された時からです。

トリノコ紙の縁を、赤色で色どり中央にオレンジ色の球と少し離れた位置に、もう一つのオレンジ色の球が墨のつけ合せのぼかしで夕闇を象徴していて、何ともたえ様のない世界に導いてくれたのです。

木版画の技法、作者の意図などまったく無に近い私にとって、衝撃的なことでした。後日、黒崎彰氏の作品集を求めて、毎日、眺めては感激していた日が、懐しく思い出されます。

※

「用具、材料が調わなくても、木の端くれと釘と有り合わせの紙と絵画があれば、そこに木版画は生まれる。材質と用具が交わり、人の精神がそこに加われば、それだけで紙の上に全く違った次元で現われる、版画の魅力とはそういうものである。」(黒崎彰の木版画 河出書房新社)

これは、黒崎彰氏が初めて木版画を志す人々へ送ったメッセージです。私はこの黒崎氏の言葉の中に、創造の原点を見たような気がします。それは私がやっている建築にも通じる事で、建材メーカー推薦の新建材に慣らされた私達に、反省をうながしている様な気さえ致します。

身近にある素材の良さを見失ない、ハイカラ主義が主流になった現在、石、竹、木等々の良材が、何の創意工夫も無いまま無造作に捨てられている現状です。先日、道端にある切り捨てられた赤木の根っこを見つけて、さっそく知人の所に運びこみ、テーブルに仕上げてもらい、現在施工中のY氏の所に搬入。

「Yさんこの木は、道端に捨てられていた赤木ですよ、カンパチがありますが無いですか。」と申し上げたところ、Y氏は、

「私もカンパチだから上等々。」とユーモアたっぷりのご返事にほっと致しました。道端に捨てられた切れ端でも、そこに人の心が加われば、すばらしい家具となり、建築空間を構成する要素ともなるのです。

Y氏に、ますます使いこんで、黒びかりさせて下さいとお願い申し上げました。きっとY氏がこれから愛情を込めて使っていただければ、あの赤木の根っこは、ますますその真価を発揮し、一段とその輝きを増すことでしょう。



黒崎氏と著者(左)

学生時代、卒業記念にと初めて購入した黒崎氏の版画も、その後、次々と増えてきて、狭いアパートの壁からはみ出してしまい、今では箱の中におさまっている作品の数の方が多くなってしまいました。物は好きなところに集まってきたようです。いつの日か版画専門の美術館を建てて、多くの人々に、版画のすばらしさをじかに観ていただくのが、私の夢なのです。「愚公、山を移す」と言います。この愚公の故知に習いたいものです。黒崎氏と出合って早くも六年、那覇空港での緊張した出会い、そして開いた第一回の版画展が、まるで昨日の出来事の様に出されます。今年、初夏の風と共に、画廊沖縄で、黒崎氏の第二回目の個展が開催されます。今度はまた、どのような新しい作品と対面できるかと、今からわくわくしているところです。

(建築家)

黒崎 彰展  
4月5日→10日



昨年に引き続き、今年も開く事になった。今回は来沖のついでに「世界の版画事情」について講演会でも、との考えがあったのが見送りとなった。我々の取り組みが遅かった事と、先生の多忙が理由になるが、残念である。次回はぜひ実現させたい。

展示作品は昨年の暮、東京シロタ画廊にて発表され好評を博した韓国シリーズ「パルクォン」韓国心象が中心(8点)それに1984年から87年までの未発表15点を加えての展示会です。

■アフリカンアート展

4月19日→24日



アフリカの彫刻は今世紀の初め、ヨーロッパの美術界に大きなショックと影響を与えた事で知られる。特にピカソやモジリアーニ、ブラック、レジェなどの作品を見れば明らかである。これらの彫像や仮面が、現在でも西アフリカを中心とした多くの部族間で使用されていると云う。各部族には必ず彫り師が居て、部族の宗教的儀式や、個人的な儀礼に使用する呪物として作られているようである。又、単に美術的な視点から観ても様式や形態が自由で多様性に富み実に興味深い。彫刻の作られた目的や、その部族の生活など背景を探っていくと、少しずつアフリカの文化が見えて来て、奥が深い事を知らされる。ぜひ見て欲しい展示会である。

ギャラリーマン

画廊をスタートさせる当初より、その構想の一つにあった「アート情報誌」が今月発刊されました。スタッフのひとりとして、その実現を心より嬉こんでおります。

我々営業部の仕事は、画家からお預りした作品を持ち歩き、コレクターや絵画ファンと直接面談して、作品を販売しております。その中において、創作する側と作品を購入される側から一美術に関するいろんな意見や質問、要望等を受ける事がよくあります。

しかし、その意見や質問等に100%明快にこたえる事は仲々容易ではありませんでした。今度発刊のザ・ギャラリーボイスに拠り、両者からの意見等に対し今まで以上におこたえ出来るものと期待しています。

そして営業部においては現場の生の声を内輪だけの話に終えることなく、拡く一般の絵画ファンにも情報の一つとして提供して行きたいと思っております。その結果、コレクターと画家、画家と画廊、画廊とコレクターとのコミュニケーションがより一層深まって行くと

思います。

最後に、これからも我々営業マンとウーマンがすばらしい作品を持って皆様の所へお訪ねするかと思っております。その際は、どうぞ宜しくお願い申し上げます。(営業部長) 大城忠

編 集 テ ス ク

「拝啓、陽春の候、皆様には……」とごアイサツを思うのだが、この小紙ギャラリーボイスの趣味に合わない。やはり第一号の創刊はイメージが大事忌憚のない率直な声を信条としたい。

さてこの類の情報紙はギャラリーの又もう一つの仕事だと前々からアタマに在った。しかし思い立って実現するまで、こんなに時間が要ると思っても見なかった。とにかく潰さない、潰れないと本体の画廊の運営が一進一退の連続だったから情報紙など手が届かなかったのである。

スタートした以上できるだけ長く、続けたい。小紙だから内容に重点を置いて、スリムに反ビジュアルで写真の少ない情報紙にしたい。決して楽しんで欲しくない小紙でありたい、等々言い出したらキリがない。

又、オーバーワークして3号紙ににらにしよう、自らの力量と状況のバランスを考えながら続けたいと思う。

内容はごらんの通りで評論、画家、美術ファン、画廊情報の四本柱を基本として、それぞれの立場から、あくまでも前向きな意見、提言、評論、作家論、画家の現場、周辺の声、美術ファンの率直な声など取り上げて行きたい。皆さんからの率直な声、寄稿、投稿を待って居ます。(上原)



絵画(油彩・水彩・版画)の専門店

画廊 沖縄

〒900 沖縄県那覇市泉崎2-2-3 ☎(0988)34-6760

作り手から使い手へのメッセージ



クラフトギャラリー&染織サロン  
〒900 沖縄県那覇市久茂地3-3-1  
(サンパルクビル2F)  
☎(0988)63-1502

